林業技術センター
普及班便り
（第42回）

いわての林業人21

はじめに

今月の普及班便りでは、盛岡市内で原木生シイタケ生産に取り組む、新進気鋭の藤村正樹さんをご紹介します。

参入のきっかけ

藤村さんは2年前に栽培を始めました。前の職場から実家に戻り、最初は実家の農業（産直向け多品目栽培）を手伝いましたが、経営の効率化と収入の向上を目的に、作物の一本化を検討していたところ、同じ農業の友人から、産直にシイタケを出荷しないかと誘われて、シイタケに目が向きました。さらに、実家所有のナラ林が盛岡市内にあり、「自分で伐れば原木代が掛からない」と考え、参入を決めました。

その後、ＪＡいわて中央から、矢巾町の谷村清朗さんを師匠として紹介して貰い、指導を受けつつ栽培に励んでいます。

藤村正樹さん

栽培してみて

シイタケ栽培の感想を尋ねると、「とにかく楽しい。」と言い切りました。葉や茎が常に見えている野菜とは違い、普段は作物の本体（菌糸）が見えないのに、自分の努力が突然「芽切り」となって見えることが面白くてたまらないそうで、他にも自分のスケジュールに合わせて作業工程を調整できること、そして何よりお金になることが、楽しさの理由だそうです。

原木伐採も手慣れた雰囲気でしたが、初心を忘れず、「慣れた時が怪我する時」と肝に銘じているそうです。

同年代の生産者、立花さんと

経営について

初年にはハウス、水槽、フォークリフト等を導入し、現在の収支は赤字だそうですが、このままのペースなら、今後5～6年で回収できそうだ、と見込んでいます。それでも「新規参入時の設備投資が大きいので、補助や融資制度を充実させて欲しい。」と、今後の参入者を気遣います。

主な販路はＪＡと産直で、品物によって売り先を変え、収入の向上を図っています。いずれも売れ行きは好調だそうで、「岩手県産は市場でも高い値がつき、満足している。産直も併せ、出すだけ売れるので、努力する気になる。」と明るく語ります。また、「味と労力を正当に評価して欲しい」との思いから、最近、産直向けの単価を上げましたが、売り上げは昨年より増えているとのことでした。それでも価格の設定やお客さんとの対応には悩みが多く、産直出荷を通じて学ぶところが大きいそうです。

慣れた様子で原木の玉切り

おわりに

取材を通じ、お客さん、師匠、友人といった、人とのつながりを大切にしている印象を受けました。今後も情熱とネットワークを活かし、おいしいシイタケを皆さんに届けてください。

林業技術センター普及班
０１９（６９８）１３３７